

総合2025 気づきの先はいつも晴れ ～心にかかる霧を晴らそう～

第7回 5月29日(木)13:00～14:30

もやもやサステナビリティ



福永真弓氏

(東京大学大学院新領域創成科学研究科・社会文化環境学専攻・教授)

会場：津田塾大学小平キャンパス特別教室

<講師プロフィール>

東京大学大学院新領域創成科学研究科・社会文化環境学専攻・教授。環境社会学と環境倫理が専門で、サケやニジマスなど特定の生きものやモノと人間との関わりを柱に、人間とは何か、自然とは何かを探究してきた。現在は海藻養殖にも着目し、気候変動への適応がもたらす人間存在および自然存在の変化を追いかけている。惑星倫理についても食という観点から探究中。主要著書に『サケをつくるひとびと：水産増殖と資源再生』（東京大学出版会）、『多声性の環境倫理：サケが生まれ帰る流域の正統性のゆくえ』（ハーベスト社）、共編著に『答えのない人と自然のあいだ：自然「以後」の環境社会学』（新泉社）、『環境倫理学』（東京大学出版会）、『未来の環境倫理学』（勁草書房）、『汚穢のリズム：きたなさ・おぞましさの生活考』（左右社）、Adaptive Participatory Environmental Governance in Japan: Local Experiences, Global Lessons (Springer)など。

<担当スタッフより>

福永さんの文章である「かきまぜる一にごりの海の透明度」は今年度の国際関係学科の入試問題に出題されたそうです。どのような文章だったか記憶にある方もいるかもしれません。今回の講演では、「環境にいいことをしたいんだけど、なんだかどれもマウンティングの道具のようにも聞こえてしまう」など、サステナビリティや環境問題をめぐるもやもやから出発して、無関心であることや単なる選択肢の問題に還元することなく、人と自然の関わりについて考え直す機会を提供していただきます。例えば、人間活動が与える影響は今日気候にまで及んでおり、人間が気候に影響を受けるのではなく、気候が人間から影響を受けているという事態が地球上で起きています。私たちが世界、及び環境を変える力を持ったとしても土台が地球であることに変わりありません。このようなことを踏まえて、自分が今までもこれから生きていくことになる世界、地球と一度真剣に向き合ってみましょう。